

平成13年度

駐村研究員会議報告記録

新規就農と地域振興

平成13年度駐村研究員会議は、平成14年2月1日に「新規就農と地域振興」を共通テーマとして開催された。報告者は以下の通りである（敬称略）。

石川 玲（岩手県北上市）

福田 隆治（島根県大田市）

会議の進行は、千葉修部長（地域振興政策部・当時）および後藤淳子研究員（評価・食料政策部・当時）が担当した。2人の報告後、討論および各駐村研究員からの情勢報告が行われた。会議には関係機関等所外からも多数の出席をいただいた。以下は同会議の記録のうち、紙幅の都合から、2人の報告部分を企画連絡室研究交流科の責任において編集・整理したものである。なお、以下の報告を含め、当日の様子は「平成13年度駐村研究員会議議事録（<http://www.primaff.affrc.go.jp/annai/soshiki/kiren/koryuka/chuson/index.htm>）として公表されているので、関心のある方は参照されたい。

○**司会（野部）** 本日の会議は、座長の司会のもとに進めさせていただきます。座長は、地域振興政策部の千葉部長、そして評価・食料政策部の後藤主任研究官です。

○**座長（千葉）** それでは、これから会議に入りたいと思います。本日、午後の方を主に司会をさせていただきます地域振興政策部の千葉でございます。

○**座長（後藤）** 午前の時間進行を担当しています後藤と申します。よろしくお願いします。それでは、皆さん、お待ちかねですので、岩手県からいらした石川さんに、よろしくお願いします。

○**石川** ただいまご紹介にあずかりました石

川玲と申します。

私は、埼玉県から岩手県の北上市の方にエターンいたしまして、今現在は農協の農業研修というものを受けています。この3月から独立して農業を始める予定であります。農業に関しては、皆さん長い間かかわっている中で、私は農業を始めたばかりなのですが、今回は新規就農というのがテーマということで、農業にかかわりのなかった私がいかにして農業という道を選び就農しようとしているか、その理由や過程を詳しくお話しして、皆様各々の地域の新規就農に関する状況ですとか、問題や課題、また地域振興とのかかわりなどについて少しでもお役に立てたらうれしいと思っています。

まず第1に「今日に至る軌跡」ということで、今現在に至るまでの私の状況をお話ししたいと思います。

「高校までの生活環境」ですが、私はこのすぐ隣の印刷局の東京病院、北区で生まれました。生まれてすぐ埼玉県の浦和市の方に引っ越したんですけれども、両親とも共働きのサラリーマン家庭で、家に農地があったわけでもなく、また親戚にも農家というのはございません。全く農業というものとは無縁でありました。ただ、高校時代にかけて自然科学というものが好きで、たまに親に連れられて山に登ったりなんかして、そういう自然に触れ合うのをとても楽しみにしておりました。

やがて学生になり、何となく埼玉みたいところにいるよりは、どこかもうちょっと地方に行きたいという考えがありまして、島根県の松江市で大学生活を始めました。自然科学が好きだったこともあり、地質学というものを学んで学生時代を過ごしました。

松江は結構好きな町だったのですが、就職することになって、やはり実家には戻りたくないけれども、近くの方が親にもいいかなと思い、埼玉県秩父の石灰製造業の方に就職しました。3年半ほどいたんですけれども、いろいろ理由がありまして実家に戻りました。東京の上野にある地質調査業という会社に転職し、そこまでは寮生活あるいは学生のときは学食などに行っていたんですけれども、特に食生活というのには全くと言っていいほど興味がありませんで、自炊もしたことはありません

せんでした。

転職先の地質調査業にいたときに、農業に興味を持ったきっかけというのがあるんですけども、地質調査するということで、かなり地方出張の長期滞在を全国でやっておりました。兵庫県とか奈良県、岩手県、福島県、山形県、そのほかにも秋田県、滋賀県、神奈川県。とにかくいろいろなところで旅館に泊まり、現場で作業をしておりました。

高校のときから地方に定住したいという漠然とした夢があって、それがかなり地方でいろいろな仕事をしているときに、やっぱりこういうところで暮らすのはいいなと思いました。あとは地元の旅館の人とか、あるいは農家さん、要するに地主さんと結構調査の交渉とかをして、地元の人とおつき合いがありました。今まで子供のころまでなかった、例えば仕事をしていると大変だろうということでリンゴをいただいたり、いろいろのコミュニケーションがあって、農業について漠然とした知識を得ることができました。

その後不況もあり、99年1月に、会社が倒産しまして、無職でいるわけにもいかなないので転職を考えなければならなくなりました。時間もありませんでしたのでいろいろ考えたんですけども、30に入ってからちょっとたったところです。今までの知識を生かしてまた同じような業種で働きたいというのが一番近い道です。事実面接も二つほど受けました。感触としては悪くなくて、給料も前の会社よりいいのではというところがあったんですけども、地方で現場仕事をしていても、いかにせんやっぱりどうしても地に足のつかない、現場で数週間か数カ月過ごして東京に戻って、まとめをしてという繰り返しで、なかなか落ち着いて生活ができないのではないかと、ちゅうちょしていました。

農業というのは憧れではなくて、地方で暮らしていく生活をしたいというときに、農業という産業を選んで転職というのはどうだろうかとか真剣に考え始めました。ひとり身で気楽だったせいもあるんですけど、結構半年ぐらい考えました。北上に行くまでは半年以上かかったんですけど、いろいろ条件はそろっていたと思うんです。要するに、気楽だったこと、親も特に反対もなかったということ。家族を

持っている人は、すぐに転職して給料をもらわないとローンが残っていると、子供の養育費とかで皆さん大変だったようなんですが、私の場合は実家にいたものですから、失業保険だけでも何とか暮らせましたし、そういう意味では、ゆっくり考えた後に就農しようということを決めました。

まず、どこにしようかと考えたんですが、迷わず出てきたのが岩手県ということになります。これは今まで仕事で全国各地を回っていたことと、大学も地方だったんですが、私は岩手県というのが一番印象がよかったんです。地主さんとか、あるいは景色もよかったですし、そういうことで迷わず岩手県にしようということ。何をつくろうかと考えたときに、米とか野菜とかいろいろあると思うんですが、お米はいろいろ新聞で当時から減反でなかなか大変なのはわかっていましたし、機械化も、とにかく機械をそろえるのに1000万円以上かかるということで米はだめだし、花は食べられませんので、やっぱり食生活にいろいろ役に立ちたいので、野菜を考えました。果樹は植えてから数年たないと収穫できません。畜産は、犬より大きい動物を飼ったことがなかったので、いきなり畜産は大変ではないか。そこで、野菜をやりたいということで、まず地域とつくりたいものを決めて、雑誌を読みまして、東京の池袋サンシャインであった就農相談会に参加させていただきました。それが99年の4月です。

島根県のブースとかもあって、ちょっと懐かしいなと思ったんですが、迷わず岩手県のブースへ行きました。野菜をやりたいんです、といきなり言ったんですが、紹介されたのが岩手県北上市の就農支援制度であります。それで、現在も農協の職員として働いているんですが、北上市農協の農業研修制度について、ちょっとお話ししたいと思います。

まず、臨時職員の待遇が得られまして、給料は月給制でありました。さらに、ある程度たつとボーナスももらえますし、週休2日でも有給もあるということで、サラリーマンをやっていた人にとってはかなり入りやすい条件でありました。

要するに、技術の習得は農作業なんです。仕事というのは農協の研修農場というのがあ

りまして、100坪のハウスが5棟と露地が全部で1町歩ぐらいあったんですけれども、その管理をする仕事でした。売って金になったのが全部農協の収入になるんです。とにかくどれだけ売り上げを上げるかというのが研修生の腕にかかっていて、そういうことで仕事として技術を学べる。そのほかに農家研修とか、あるいは流通研修とか、後で述べますけれども、農業大学の研修とかが充実していました。

農家研修は、要するに地元の先進農家の方のところへ行って、ちょっと圃場を見せてもらう。あるいは紹介されるということですが、流通研修は、一番簡単なのは選果場でトマトの箱詰めをしたり、そういう作業を手伝うこと。あと、農協の研修旅行は東京の方に来て、横浜の丸中青果に行って、流通現場の見学・研修をさせていただきました。地元農家への紹介ということで、とにかくいろいろ連れて歩かされました。農協の人は地元の人をみんな知っているわけですから、ちょっと連れていって、「今度来た研修生の石川君だ」ということで、本当にいろんな人に紹介されました。名前はすぐに忘れられてしまうんですけれども、顔の方は、こういう人がいるなと覚えていただきました。

それで、つくった作目の方なんですけど、農協、研修農場のカレンダーというのを3年分資料につけましたけれど果菜類から葉菜類、根菜類、それから花も切り花、鉢花をつくって、あと水稲もやりました。

入ったのは99年8月で、仕事はトマトの収穫と出荷から始めまして、農協からアパートを紹介してもらって生活を始めました。臨時職員の給料というのが10万円ちょっとでありました。紹介されたアパート家賃が4万円を超えていまして、あと残り6万円で生活しないといけなくて、しかもサラリーマンのときに生命保険を掛けたりしていたものですから、月々の食費というのがかなり少なくて、それで3食自炊を、初めてこのときにご飯を炊いたのですが、とにかくやむを得ず生きていくために自炊生活を始めました。

そこで初めて、スーパーへ行きまして、安いスーパーはどこかといういろいろ探し回ったり、そのときから、野菜に関してが主なんで

すけれども、とにかくスーパーに行って観察することを始めました。どこの野菜が来ているだとか、今の時期は幾らで、夏にホウレンソウが高いというのは知りませんでしたから、そういうことから勉強しました。トマトをつくっていましたが、トマトは買うわけではないのですが、毎週スーパーへ行っただけで、どういものが来ているか、劣化があるのかどうかとか、とにかく観察を始めまして、そういうことも今の知識をふやすのには役に立ったと思っております。

農業研修生として当初感じたことは、農業についてほとんど知らないで来たわけなんですけれども、いろいろ向こうで農家の方と話をしたんですが、皆さんとにかく経済状況が厳しくて、普通に生活しているように見えるんですけれども、大部分の方は兼業農家で、とにかく農業収入はかなり少ないんですね。そういう感じで、やっぱり専業農家をやりたいと思って行ったんですけれども、専業農家ではちょっと暮らしていけない。車1台買えないような状況だなということです。農協とか、北上は工業地帯でありますので、そういうところに勤めていて、とにかく皆さんほとんど兼業農家でやっていらっしゃる。専業農家で家族でやっている方ももちろんいらっしゃるんですけれども、そういう方は1人でやっている方はいません。要するに、夫婦と両親、おじいちゃん、おばあちゃんとにかく手広くやっている。水稲から果菜類から、北上は里芋の産地なんですけれども、そういう特産品をやったりということで何とか生活をしている。それでもやはり厳しいという声しか聞こえなかったです。

あと、技術の確立なんですけれども、これも当初から予想されていたんですが、とにかく1年や2年やって、この研修は3年で自立させるんですけれども、3年で技術が確立できることはなくて、とにかく10年やらないと一人前にはなれないと言われたんですが、まさにそのとおりだなとわかりました。

あと、天候には悩まされまして、毎日天気予報を見るのが癖になったんです。冬の雪もそうなんですけど、夏の暑いのが続くと、ハウスの中での作業も大変なんです。あとは機械ですが、くわ1本持てるものかと半分

考えていたんですが、そんなことはなくて、機械を買わないと生活できるだけの収入が得られないということで、自立するときには、あれも買って、トラクターを買って、管理機を買って、ほかにも運搬車だ軽トラだと言われると、やっぱり金がなくていきなり農業を始めるとするのは全くできないな、と思いました。

また、耕作地の状況なんですが、北上の中心部は、県内でも一番だったと思うんですけども、米の産地でありまして、きれいになっています。それでも山の方に行くと耕作地はかなり減っていきまして、荒れているなど。目立たないんですが、放棄地というのがあったということにはわかりました。

次に、地域についてですが、やはり田舎に行くとか閉鎖的だよという話をよく聞いたんですが、北上は全然そんなことはありませんで、皆さんオープンに接してくれました。ところが、いざ、土地を売ってくれと言っても、売ってくれる人はまずいない。知り合い同士でしたら貸すということはするんですが、知らない人に売るということはまずしませんということがわかりました。かといって、要するに勤めとかに出ていて、減反分もあるので、なかなか土地を有効に利用することができないんです。荒らしたくはないんですが、土地は売りませんということは、結構厳しいなということがわかりました。

あとはやっぱり高齢化と担い手不足なんですけれども、そういうのは行った当初から言われていまして、頑張っている方は70歳を超えているという状況、60、70歳で、会議とかで集まってもおじいさんばかりで若い人はほとんどいない。若い人も、もちろん向こうでいろいろ知り合いになったんですが、知っている人以外はほとんど来ないので、限られているのかなという状況だと思いました。

次に、研修と同時に岩手県立農業大学校の新規就農者研修というのを2年にわたって受けました。これについても、今現在の私にとってかなり役に立っていて、技術は農協の研修農場の方が毎日管理するわけで、そっちの方がよかったんです。あと、流通とか経営とか、先進農家に関していろいろな知識を得ることができたんですが、流通は市場に行

って研修させていただいて、経営についても座学でいろいろ先生を呼んでお話をしていただきました。その中で、一番大きかったのは、県内外の研修旅行で、先進農家をいろいろ回れたことです。7月、8月とかに、とにかく有名な方のところに行って、圃場を見せていただいたりお話を聞いたりしたんです。圃場を見せていただくのがやっぱり楽しみで、いろんな工夫をされているのが一番よくわかるので、行って向こうで、ああ、こういうことをやっているなと思って、言葉は悪いんですが、ノウハウを盗んでくるということを結構やりました。これは使えそうだなと思ったら自分でやってみるということをとにかく心がけました。

あとは新規就農ということで、仲間をつくり、夜は2泊3日で1年に10回、月に1回ぐらいのペースで集まりました。毎晩飲むのが一番楽しかったというのがあるんですが、次の日の午前中の講義はみんな酒臭かったという事がありました。飲んでいろいろ悩みだとか、これからのことだとか、そういうのを話し合っ、私もひとりきりで行ったものですから、やはりUターンの方もいらっしゃいましたし、Uターンの方で東京に住んでいた方も結構いたので、いろんな話をして、仲間をふやしたという感じです。

研修は2年目、3年目と続くんですけども、2年目はとにかく作目はふえまして、私もあれもこれもやってみようということで、果菜類であるトマトとピーマンと一緒にやりました。ちょっとこれには無理がありまして、研修生もふえたんですけども、作業が追いつかなくて、みんな中途半端になってしまいました。最後は管理が行き届かなくて収量がガクンと減って半分以下ということで、かなり農協の収入が減ってしまいました。給料が減ったわけではないのでその辺はよかったんですが、独立したらこんなのではダメだよ、とかなり言われました。そういうのも研修の一つかなというふうに思っていて、2年目になって初めて年間の農業サイクル、1年はこうやって過ぎていくんだなということ勉強しました。

研修生がふえたんですが、やはりふえるのもよしあしがありまして、農業をやりたいと

ということで人は来るんですが、自分の理想とか、今後やりたいというのに、それぞれ個人差がありました。私は一応先輩だったので、こういうふうにするんだと教えていたんですけども、反発されて、険悪な雰囲気になってしまったこともあったんです。私も引く方ではないので、2年目はかなりけんかしました。ほかの人に聞いてもやっぱりそうで、自分の理想とか考えとかは、就農するパターンでもいろいろありまして、無農薬でやりたい人もいし、生活するためにはいろいろ工夫する。いろいろなパターンがあると思うんですが、とにかくいろんなタイプの人がいるということに勉強しました。

3年目には、次の年には就農するんだということで、農協の方から1人でやれと、新たに圃場を用意してもらいました。就農のシミュレーションということで、1人でハウスを管理してつくって売りました。かなり気楽になって私は楽しんでやっていたんですが、ハウス100坪3棟なんですが、それを1人で就農するときにやるような作物をと考えました。さらに北上は一応雪が降っても除雪しなくても大丈夫なところなので、ハウスの周年利用ができますから、3年目は作目を絞って、トマトと花のストックとパンジー、あと葉菜類を選択して、1人で管理をしました。

実を言うと、今までは研修農場で研修生でほかにも手伝ってくれる人がいたんですけども、集団で営農をしているような感じでありました。就業時間というのも農協と同じような感じで朝8時30分から昼休み1時間の夕方5時までで、もちろん夏の時期は収穫が間に合わないのが早かったんですけども、結構そういうサラリーマンばい生活をしていました。あと、土日休みで当番の人がやるというような感じでやっていたんです。3年目になって、一応当番の人はついてくれたんですが、1人でやると、そのときに初めて農家時間というのを体験しました。今までサラリーマンのときは、朝はぎりぎりまで寝ていたんですが、早く起きないと収穫が間に合わなくて出荷ができなくなるので、とにかく朝は早く起きて、昼は寝て、夕方まで日が暮れるまで働くということを初めて3年目で体験しました。また苦労はしたんですが、やはり

それはやってみないと就農というのはなかなか無理だな。それでやって何とかできたので、就農についての自信が少しはついたということです。

3年目と同時に就農の準備に入りまして、まず就農地を探すということなんですが、農協は、初めに研修に入るときに就農地は探しますよということで、約束どおり探していただいたんです。私は5反歩で始めることにしていたんですが、5反歩まとまった土地を探すにはちょっと農協も苦労したようです。それでも二、三カ所候補地があって断られて最終的には決まったんですが、やはり土地を貸したいという人はいるんですが、田んぼ1枚とか2枚とかの状況で、まとまって5反歩というのは難しかったです。

あとは、普及センターとかなり緊密に相談しました。認定就農者の資格を取って制度資金を借り入れて、ハウスの購入も農協が建てて、それを無利子でリースという形で自分の資金をオーバーしない状況で借りることができたので、就農準備は順調にいったと思っています。それで現在に至っているわけです。

2番目に「今、考えていること」ということでちょっとまとめてみたんですけども、まず研修を始める前に、テレビとかメディアとかをいろいろ見ると、農協の悪い点というのがかなり紹介されていて、農協というのはどういふものだろうということもあったんです。事実、農協とかなり深くかかわってきたんですけども、やっぱりトータルで見ると、かなりいい点があったと思います。とにかく地域に早く溶け込めたということがありました。1人で行って、いきなりここで農業をやるといっても、まず回りの人は怪しげな目で見るといふのは確かだと思うんです。事実苦労をされた方、いろいろイターンの方とかのお話を聞きましたけれども、農協の後ろ盾がありますと、紹介されるのは、農協の職員の後ろについていって、こういう者ですと言うので、かなり向こうの方も農協に来た人だからということで信用されました。あと農協の広報にも載りましたし、とにかく顔だけは知っていただいたということで、農家の方にも紹介してもらったので早く溶け込めたのでよかったです。

あとは、土地問題についても苦労したという人がほとんどみたいなのですが、私の場合は全然苦労しませんでした。結果的に、町中でちょっと堆肥の問題とかがあるようなところなんですけど、そういうところでも、ほとんど苦労せずに借りられる土地が見つかって本当によかったなと思っています。行政機関とのつながりもそうなんですけど、個人でいきなり普及センターに行って農業をやりたいんだけど、土地はないかと言っても、普及センターの人が困るというか、ここは違うから、農業委員会へ行ってくれとか、結局たらい回しになることが多いらしいんです。私の場合は、とにかく頼むのは全部うちの係のセンター長の方に、こういうことをしたいんですと頼んで、それからいろいろ行政機関に連絡してもらったので、すばやく動いてくれました。そういう面でかなり楽をしたと思います。

あと、資金の借り入れについても、先ほども述べたように、とにかく農協は金をかけて就農させようとしていて、積極的に動いてくれたので、こちらとしては助かりました。施設の導入もそうで、農協の知り合いの業者さんとか顔見知りになったりもしているので、今度は農協を通さないで個人で買おうかみたいな、そういう悪い話もしたりしました。

Ｉターンで苦労して入った方には、やはり農協とかかわると自由に動けなくなるよというような話は聞いたんですが、でも、それも私の考えとしては利用の仕方ではないかと。もちろん、いいところもあるので、それは最大限活用して、あるいはその中でいろいろ動いていきたいなと思っています。

次に、岩手県内にもＩターンの方とかいろいろいらっしゃるんですけども、交流なんですけど、全国各地から、特に東北とか関東の方が多かったんですが、そういう方とは農協の紹介でも会いました。あと、生産者大会とか今の時期になると多いんですが、農協主催、県主催、いろいろあるんですが、そういうのでいろいろお会いしました。あとは農業大学の研修でも、価値観や意見の違いはあるんですけども、それぞれ個性を尊重しながら意見の交換を積極的に進めていきたいなと思っています。

次に「農業者を志してみて」なんですけど、

振り返ってみると、とにかく環境というのはかなり整っていました。先ほど言ったんですが、農協に入ることによって地域に溶け込めましたし、友人、知人とか知り合いもできましたし、土地とか資金の問題もかなりスムーズに解決したので、そういう条件を生かすも殺すも自分次第だなということは思いました。ほかにも研修生は来ているんですが、周りとの交流とかに積極的でない人というのは、やはり取り残されていってしまって、ちょっとこれから一人で自立するのは難しいのではないかなという人も実はおりました。やっぱり自分で積極的に動かないと、せっかくこんないい条件で就農できるというのに、自分の考えをしっかりと持たないとダメなんではないかと思っています。

あとは「自分なりの指導者を選ぶ」ですが、私の場合は、農協の営農指導者の方と指導機関の普及センター、あるいは生産者の方とか、とにかく農場に来ていただいている指導者さんですけども、3者とも全部言うことは違いまして、ああしろ、こうしろと言うんです。最初の1年はかなり悩みました。結局、自分で一番信頼できるという人を選んで、その人の言うことを聞いて、ほかの人のものはいいと言うんですが、ちょっと聞き流したりもしました。私は地元の生産者の方を選びまして、その方の話を一番よく聞きました。あと、農協と普及センターは、それぞれ関係が悪くならない程度にお話を聞きました。

就農の成功例というのは、私も先輩方とおつき合いする中で聞いたんですけども、失敗例というのは全く表に出てきません。話を聞くと、どこそこではだれだれが失敗してどこかへ逃げたとか、そういう話がかかなり多いというのを聞きまして、自分が就農するときには、就農しようとして失敗した人の例を学ぶ必要があると思います。なぜ失敗したかという原因を理解しないと、自分が同じような失敗をしないように、ほかの地域のＩターンの方とかと話をして、こういうので失敗したんだという話を聞いて肝に銘じるというか、そういうのを聞くことにしました。

次に「現在の心境」ということなんですけど、農業の現実というのを知りまして、特に今一番気になっていることなんですけど、野菜、ト

マトなんかは多いんですが、輸入野菜が多くてかなり問題になっています。ピーマンなんか特にそうなんですが、やはり年々どんどん値段が下がって、これは大変だという話になっています。やっぱり食料に関して関心のない方は安いのを買うのは当たり前だと思うんです。もう消費者の方はしょうがないと思うので、それに対してどうしたらいいか。テレビでもやっていましたけれども、規模を大きくして機械を導入して人件費を削減して、ネギでやっていたと思うんですが、とにかく値段を下げて何とか輸入品の何割増しぐらいだったら消費者も買ってくれるという話をしていました。

私の考えなんですけれども、それだけでは結局農家が全部かぶることになると思うんですね。いろいろ引かれるわけです。途中で流通経費だとかいろいろ引かれて、農家に残る手取りは結局少なくなっているんで、それだけではなくて、例えば農業にかかる産業全体が協力して、運送にしてもそうですし、肥料、農薬、資材にしてもそうですけれども、同じ値段で売って野菜が安くなった分だけ農家の手取りが減っているという状況です。やっぱり協力して、難しい問題だと思うんですけれども、それぞれ安くすれば何とか農家も生き残っていける道が開けるのではないかと思います。このままていくと、農業という産業全体がつぶれてしまうのではないのかという危機感がありますし、せっかく私もこういう道を選んだのに、今後、先細りのところでは嫌だなと思っています。

農業で生活していく上の工夫として、もちろんそういう工夫もあるんですが、あとは売り方の工夫をして、いかに消費者にアピールするかということで、消費者とのコミュニケーションが必要になってくるのではないかと思います。

今回のテーマにもあります「新規就農と地域振興」についてなんですが、とにかく魅力ある農村というのは、長野県なんかそうだと思うんですけれども、Iターンの方にも結構人気があると思うんです。そういうところにはIターンの方も農業をやりたいと行くでしょうし、Uターンの方ももちろんおられると思います。あとは地元の青年になっても、新

しい人がどんどん来て農業を始めれば刺激になると思うので、結局、地元の人と来た人の交流というのが生まれると思います。イベントとかがあれば、特産品をつくろうとか、伸ばそうかというやる気が出て、そういう流れというのが出てくると思うんです。そういうところは大体消費者に有名だったりすると思うんですけれども、こういうことが地域振興につながるのではないかと思います。

北上市についていえば、イベントとかに出る若い人というのはほぼ決まっております、いるんですけれども、私も含めてそうなんですが、Uターンの方とかIターンの方とか、常連で顔を出していますので、そういう人で盛り上げて情報交換とか悩みとか、いろいろ将来について話し合えば、今後伸びていく可能性はあるのではないかと思います。

最後に「これから（将来）の目標」ということで挙げてあるんですが、やはり主体は系統出荷でいきたいと思っています。これは農協を大いに利用して、ある程度特産地であれば、市場も主要作物を高く買ってくれるということで、協力をしていかないと、産地とかがつぶれた場合に、ではこれをどこに売るんだと。やっぱりその後苦労すると思うので、今つくっているものを、ある程度安定した量を安定した値段で売るということで、とにかく農協には協力していきたいと思っています。あるいは農協がこういうものをつくりたいというものであれば、適地適作と書いてあるんですけれども、要するにその地域に合ったものであれば協力していきたいと思っています。

その上で、少量多品目でつくってみて、地元の方に新鮮なものを供給して、地場消費というのを促してもらうということで産直を積極的に利用していきたい。あとは最後に「インターネット販売の可能性」なんですが、全国的な独自の販売ルートというのを構築することができたらいいなと。これは友人、知人を足がかりにしたいんですが、そういうことを夢ということでしたいなと思っています。

最後に、3月から就農するんですけれども、今と5年後についてなんですが、土地をむやみに増やすのではなくて、やはり1人でやるということで限界もあるので、ハウスの有効

な利用ということで、特に5年後には同じハウスで年3回転、トマト、ストック、そしてレタスなんですけれども、3回転させて施設の高度な利用というのを主体に考えていきたいと思っています。

以上で発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

○座長 石川さん、どうもありがとうございました。時間も本当にいいところにおさめていただいてありがとうございました。つづいて2番目の報告、福田さん、お願いします。

○福田 福田と申します。

「新規就農と地域振興」にもとづいてお話をいたします。

集落農業研修会のパンフを持ってきたんですが、この表紙が実に象徴的といいますか、休耕田で集落の方が共同で大豆をつくっているという写真です。

おばあさんが5人、おじいさんが2人、真ん中に30ぐらいの若い男性がいっぱいいます。この写真を撮られたのは恐らく県の方で、このパンフをつくられたのも県の方ですけども、これを表紙に持ってきておられるのはそれなりの意味があると思われます。恐らく平日だと思います。平日の姿というのは大体こんなもので、真ん中に30代の男性がいるというのがめずらしいぐらいです。要は、中山間地農業の象徴的な写真だと思います。この表紙をつくづく見ますと、ううんとなる。こういうところに私もおります。

島根県の大田市というところは、人口3万ちょっとで3万ヘクタール、ですから1町歩に1人ぐらいの人口の密度で、私が小さいころには、市では福島県のいわき市に次いで2番目に大きな市と教えられました。市とは言いましても中山間地のそのまた中山間地ということでございまして、私が住んでいるところは、その大田市の中心部から5キロぐらい入ったところでございます。

5キロですから、不便だとか、そういうところではないんですが、先ほどからもお話がありましたように、高齢化とか、担い手がいなかったりとか、子供がいなかったりとか、そんな状況で、山林も含めまして、農林地は荒れに荒れまくって、ヤブにのみ込まれるような勢いでございます。山に入ったら、今度は出るのが難し

いぐらいすごい状況です。そういうところに私はリターンいたしました。

つぎに、自己紹介ですが、私は今53歳です。3年前の50歳のときに一つの区切りとして退職いたしまして、帰ったわけです。実は女房と子供が2人おります。下の子供が高校を卒業したとき私はちょうど50歳近くで、思いきって現役で信用あるうちにと、埼玉県草加市に自宅を2500万円のローンで調達して、妻子は今そこで生活しております。経済的にも何かときびしい訳ですが、無理を言って好きなことやらせてもらっているような訳です。

田舎の両親の方は80歳前なんですけど、体も大変きつくなっているということで、五反百姓ではありますが、帰りたいということでやめたわけです。それは表向きの理由で、都会に疲れたというのが本当の正直なところなんです。もう一遍田舎に帰っているいろいろやってみたいということで、帰ったわけなんです。

今回のテーマにございます「新規就農と地域振興」ですが、「地域」振興でよかったなと。と言いますのは、これが農業振興であつたら私は話すことがありません。地域振興といいましても、今回お話しすることは、要するに帰って新しい風なりが吹いて、地域の活性化の起爆剤になっているというカッコウよい話ではありません。確かに、うちの村にも1人だけ最近帰ってこられまして、その人が一番農業に熱心なんですよね。あとの人は昔風といいますか、そういう感じなのです。私の話は地域振興のその前段の話になるかと思ひます。

そういうことでは余り期待しないでいただきたいのですが、帰りまして、ふるさとの現実でございますけれども、確かに物すごく厳しいわけで、厳しいとは何が厳しいかというと、まず私の懐ぐあい。幾らかの貯金はありませんけれども、非常に厳しい。あと、高齢化と農地の荒れ様、これも物すごい。恐らく私が帰ってすぐこれからお話しするようなことにとりかからなかったら、恐らくできなかったと思います。だんだん現実が当たり前のこととして、要するに荒れたふるさとが当たり前のような感覚となり、恐らく手をつけなかったのではないかと思います。昔の端から

端まできれいに耕されていた集落、牛がいたり、もちろん集落の人口も多かった。その時代はまだ食料がありがたがられていた時代で、皆が一生懸命に農業に取り組んでいた。集落は元気で綺麗だった。それが最良の方法であり形だった。今の最良のコストパフォーマンスは、要は兼業が一番いいわけですね。職業も昔より自由に選べますよね。そして、例えば5反から1町歩ある農地のうち、1反歩の田んぼをつくって、それから0.1反の自家菜園をつくって、それで兼業にでていくのが一番最良のスタイルという状況だと思うんですね。

そういう中で、我が家も実は田んぼが4反、果樹が4反、粗収入で見ますと、1反で一、二トンとれるんですが、それが安いものではジュース用の甘夏ミカンなんかキロ20円です。イナワラが17円です。東京都でごみのコストが大体30円と聞いています。だから、ごみ以下なんですね。農産品は1キロが20円から500円くらいです。ですから、幾ら頑張っても4反の果樹園で粗収入で100万から300万くらいです。それから、経費を引きます。例えばマシーン油とか肥料を引くと、ほとんど残りません。今は剪定の時期ですが、剪定から、今度は肥やしをまいて、次は草刈りを1年間に五、六回やるわけですよ。毎日毎日。人件費を入れたら、もう大赤字ですね。それでも土地や果樹があるからつくるわけですよ。

田んぼの収支のことはもう皆さん十分ご承知なのであれですが、病気なんかしたら作業受託会社に全部頼むでしょう。そうしたら逆に1反で6万円も請求されたという笑えない話もありまして、それは条件の悪い田んぼだと思いますが、収量いかんによっては本当にそんなことが起こり得るというような状況です。頼む方も頼む方だが、受ける方も受ける方と思われるでしょうが、こういうのがいわゆる限界的な状況かと思えます。限界的という言葉の意味を初めて実感したということでございます。

農業はどうなるか。おばあさんたちがよく話すんですが、「これからもう農業をやる人はいなくなるで」と。「農業は年寄り仕事よ。わしらだからできるんだで」というようなこ

とで、1キロ20円の20キロくらいのみかんのコンテナを400円ですか、そういう重くて安いものを収穫して運搬して貯蔵して、また出荷して、その間に選別して、こんなことはだれもやりませんよね。

農業は年寄り仕事の位置づけ。若い人がいるところは農協ですとか、いろいろ仕事に出ておられる。ですから、実は私は仲間と集落で牛の放牧をやっておるんですが、例えばみんな月に1回集まろうよと言っても、なかなか集まれないですね。忙しいんですよ。これが私の今一番の悩みなんですけれども、田舎だからゆっくりしていいなんていうイメージもあるかと思いますが、なかなか集まりにくい。みんなが集まらない、それぞれ用事があるというような状況が現実でございます。

さて、「農業おこしより、まずは地域のこしか」ということですが、要は村おこしとか、いろいろ耳ざわりのよい言葉はあるんですが、それを言うにはちょっとおこがましいような状況なので、とりあえずは集落を残すためにはということにふれたいと思います。農業の後継者がいないのはもとより、地域の後継者もいないというような状況もあるんです。後で申し上げますが、こういう状況では、もう農家から商店から、どんどん近くの町、その次に、石川さんが昔おられた松江の方へ、次は大阪や東京の方へとどんどん出ていく。そういう状況になればお寺も残らないというような、そういう状況になったら大変だという心配がある訳です。

私の子供は東京におりますけれども、甥っ子でもとにかく帰ってくれればと感じています。とにかく今の集落、地域を残さんといかん。残すには、やっぱり地域の人がいっぱいせんといかんわけで、地域をよくするのもためにするの、市役所がどうのこうのと、農協がどうのこうのというわけにもいきませんので、どうしたらいいんだろうというようなところが私が最初に感じたことでございました。

そして、「集落放牧の取り組み」ということでございますが、私どもの集落は小山集落と言います。農家は44戸あります。1と2とございまして、私の住む2の部落は全体で30戸。うち農家が22戸。うち半分の11農

家が高齢者のみ世帯。要するに 65 歳以下の人がおりません。全国では 7 軒に 1 軒です。14 %。ところが、我が集落は 50 % です。そして、15 歳以下は 2 人です。

かつては甘夏蜜柑団地を造成する等、営農の盛んな地域でしたが、耕作放棄された田畑や放任された果樹園が増加しています。特に山側は放棄後 10 年以上経過した荒廃地が広がっており、カメムシの害虫やイノシシなどの温床と化しております。農産物への被害が後を絶たない状況です。こうしたことから、12 年の 6 月に 8 戸の兼業農家が集まりまして、放牧の会というものをつくりまして、共同で家畜の放牧を始めました。

これは私もやる気になっていたんですが、やる気になれば何かよい縁があるもので、実は隣に農林水産省の中国農業試験場畜産部がございまして、そこがぜひ一緒にやろうということで、試験場の全面的なバックアップを得まして、やり始めたところでございます。

私たちは「わが里は美しく」というキャッチフレーズで、牛やヤギの放牧によって荒廃地の解消やイノシシ活動の抑制、それから果樹園の草刈りの省力化などを図りながら、地域資源の維持活用と美しい景観づくりにかわる活動を展開しております。今後、集落内外への浸透を図り、果樹や花木を豊富に含む放牧地の特徴を生かした活動を考えております。

組織の概要ですが、先ほどありました会員 8 戸、奥さん方を入れて 13 名、サラリーマンが 5 人、それから退職者が 3 名です。繁殖和牛を入れておりまして 9 頭、昨年、子牛が生まれましたので今は 10 頭、それからヤギが 4 頭あります。放牧面積は 11 町歩、放牧区は 7 牧区に分けております。この特徴は、全員が牛飼いの素人だということです。大切な値のはる牛をいきなり放牧するというのは、今の牛飼いの農家の方にとってはとても抵抗がありまして、発想を変えないととてもできるような話ではございません。しかも私どもは、年がら年中小屋もなければ何もないという粗放的なやり方なので、とても既存の畜産農家の方が見られたらめっちゃくちゃだというようなやり方だと思います。

放牧地の特徴ですけれども、もともと果樹園のところでございまして、非常に果樹がい

っぱいありまして、そういうものを取り込んでいるというのが特徴かと思います。甘夏ミカンなど、ほとんど収穫する人がいないものですから、年がら年中なっております、いつ来られまして、6 月は梅、秋は柿とか、とにかく果物は年がら年中何かがあります。そういう生かされない資源がたくさんあるんです。

投資や費用関係ですが、電気牧柵器というのがありまして、これは 5 万円くらいですが、これを 3 台入れております。それを大体 10 町歩余りで 5 キロメートル張っております。初期投資は、電気牧柵器が 10 万円、それから電線コードが 10 万円、その他支柱であわせて 50 万円から 60 万円です。でも、支柱なんかは市販のものではなくて、竹の支柱を利用したり、碇子もその辺の水道のビニールパイプをうまく活用して、ほとんどただで上げていますので、これをまともにやったら桁が違う金額になると思います。なるべく金をかけないということでやっております、工夫次第で大体 50 ~ 60 万円で 10 町歩できるというふうに見ていただいていいと思います。

電気代は、消費電力は 1 ワット余りでございますので、月 15 円です。ですから、ほとんど電気代はかからないと見ていただいていいかと思います。それから、労力ですけれども、当番で 1 日 1 時間ばかり監視等やっておりますが、365 日でございますので、時給 1000 円としますと年間 36 万円、ということになります。

牧場をつくる場合、電柵を張るところを刈ったりなんかいろいろ最初はやっぱり大変です。その時間が大体 900 時間かかりました。お金に換算しますと 90 万円ということで、初年度とか 2 年度は結構お金がかかるんですが、それ以降はほとんど金はかからなくてできると思います。しかも、電気牧柵は大変手軽なものですから、以前のハードな牧柵というイメージではありません。非常に簡単だということで、金がなくても時間がなくても、体力がなくても十分やっていけるということで、歳をとってもできる大変いいものではないかというふうに思っております。

放牧の方法ですが、このあまなつ牧場には牛小屋はありませんで、年がら年中の周年放

牧です。北海道でも沖縄でも牛は外で生活していても平気なわけですから、別にけちでも虐待しているということでもなくて、要は金も手間もないということです。実は金はあるところにはあるんでしょうけれども、グラウンドキーパーの仕事ですから、余りもうからないようなところによけいな金をかけたくないということでやっております。

放牧の効果ですが、まだやり始めて2年足らずで、放牧というのは本当は5年、10年の期間で見なければ大きなことは言えないのですが、きれいになるところは1年ぐらいで物すごくきれいになるわけですね。実はイノシシの被害が大変で、イノシシのお陰で合意形成がすんなりできたようなところもある訳ですが、芋がつかれない、豆がつかれない、そのうちにニンジンも食べ出す。花壇に来て、チューリップの球根とかも食べ出す。もうそこまでおいつめられておりました。こうしたイノシシの被害が減ってきました。

それから、地元の保育園の遠足コースになったり、小学校の総合学習の場所にもなったりして、集落内外で人の行き来が活発になるといった効果が出てきているということでございます。

集落でみんなでやる、共同でやる利点でございますけれども、気軽に参加ができて交代ができるというようなことで、生き物の世話というのは、365日、24時間気の休まる時がない。ところが、交代でやっていますので、割と気軽に休みもとれますし、私も2カ月に1回ぐらい東京へ出てくるのですが、その間は、当番を変わってもらいます。そんなことで牛に付きっきりにならなくてできる。

個人でやると、例えば私が1人でやったら、恐らく1町歩か2町歩で終わったと思いますが、8人ぐらいでやりますと、一気に思ってもみない10町歩ぐらいの面積に広がったというようなことがありまして、例えば、私と地主のAさんが折り合いが悪くても、ほかの会員のBさんがその方と折り合いがよければ、ぱっとうまくいくというようなこともありまして、やっぱり集落でやるというののもなかなかいいなと。

共同というのは何をやってもなかなかうまくいかないことが多いんですね。要するに、

オーナー責任者がいないわけですから、うまくいかないんですが、こと放牧に関しては、ある程度の広さの土地の確保が必要です。広ければ広いほど放牧リスクは少ないわけで、何だかんだいいながら、お互いに手を組んでパートナーをとりながらやっていくというのが土地の確保にはよいような感じがしております。

この辺で放牧で苦労した点につきましてお話しします。やっぱり用地の交渉に気がつかれます。例えば、正方形の1町歩の荒れた土地は400メートルの線で足る訳ですが、一部了解がとれないと倍の800メートルの線をはって、逆に面積は減る訳です。線ももったいないし、作業もたいへんだし、出来上がりの姿もスッパリしない訳です。何とか了解を得たいと思いましたが、やっぱり土地に対するこだわりというか、農地開放のときに、ちょっと荒れたところに手を加えただけで人にとられたとか、逆にとったとか、そういう記憶がありますので、なかなか土地の交渉というのは微妙で、牛を入れたら土地をとられるのではないかと、そう思われるお年寄りの方もいらっしゃるって、なかなか難しいところがあります。

あと、牛なんですけど、放牧の経験のあるものとそうでないものとは全然違っていて、舎飼いしたものを外に出しても草を上手に食べません。飲水場をさがすのも下手です。ということで、ある程度運動場なり放牧場ですごした牛を確保した方がよい訳ですが、放牧未経験の牛については最初が大変と言われていました。

それから、あまなつ牧場の場合、果物を食べるのどに詰まらせたりすることがありまして、生き物を飼うというのは大変だなという思いをしております。

写真がありますが、簡単にご説明しますと、右の一番上が昔棚田だったところでございます。牛が今3頭入っておりますが、杉の木や松の木が生えていたり、そういう状況です。ここを今きれいにしております。そして、真ん中の段が放牧前と後の写真です。これは放牧後半年の姿ですが、クズの葉が生い茂っていたところがきれいにゴルフ場みたいになっていますね。下段の写真ですが、冬場でも結

構果樹園には青草がありまして、去年は周年放牧ができました。今年は草が足りなくて、イナワラをちょっと与えておりますが、冬でもあまり手をかけずに放牧できるということがわかりました。それから、幼稚園の遠足のスナップ写真ですが、「おじさん、この草食べる」とか、「うんちした、おしっこした」とか、そんなことを言って、騒いでいるところです。幼稚園児だと牛もこのように近寄ってきますが、私が綱を持っていくと、どんなに馴れていても牛はわかるようで逃げるんですね。右手に綱、左手にえさバケツを持っていきますと、牛はどうするかわかりますか。牛もアメをとるかムチをとるかで悩むんですね。そんなこんなで、牛にいろいろ教えてもらうこともたくさんあります。

次のページに集落の地図がございまして。これは一筆ごとに持主の情報がインプットされております。例えば30年前の土地利用状況、それから年齢、家族構成、イノシシの被害状況等がインプットされておりまして、これは現在のものです。黄色い部分が大体耕作地です。集落の耕地は昔は50町歩ありましたが、今は25町歩です。そして、後継者が半分近くいないわけですから、あと10年、15年、この黄色い明かりのような部分がまた半分になります。恐らく10町歩ぐらいになります。昔、60戸の集落で50町歩だったのがどんどん減っていくというような状況が見えてくるわけです。イノシシがどう来ているとかという地図もアウトプットしてチェックできるわけです。

その下の表は牧場内の地目です。合計面積が1114アールとありますが、一番右に30年前の土地利用がありまして、右から三つ目の合計のところが現在です。例えば水稲は272アールから5アール、これは全滅です。それから、畑作は98アールから14アール、10分の1です。果樹が6町歩から3町歩へ半分。その分だけ保全管理地とか耕作放棄とか山がふえているわけですが、ここで見ていただくと、竹林が16アールから16アールで変わっていないように見えますけれども、広葉樹林30アール、針葉樹林189アール、この中は全部竹林が生えています。実際は、竹やぶがどんどん侵食しています。土地利用

の変化はそういうような状況でございます。

次の概念図でございまして、これはうちの会といろんな地元の組織との連携や、補完の関係を示したものです。ここで言いたいのは、集落が自分たちの力だけでやるということは、まず今の力ではできないと思います。行政、市役所なり、農協なり、だれかが音頭をとってくれるとか、ちょっとしたきっかけがないとなかなかうまくいかない。よっぽど元気のある集落だったらできるかもしれませんが、何かのサポートが欲しい。特に牛を飼う場合には、事故や病気がありますので、農業共済が絶対に必要ですね。

要は今私どもがやっておりますのは、放牧によって里地や里山や集落がよみがえれるかどうかということです。10町歩余りのところで今は2年目ですが、5年ぐらいたったらほとんどゴルフ場に近いところまでできていれば最高です。しかし、そこまで地ならしをした後にどんな種をまくか、どんなものをつかって何をするとか、どんな施設をつくるとか、そういうことはこれからなんです。集落の方のいろんな意見や夢や考えがあると思うので、それはこれからやっていこうということで、今回は大変恐縮ですが、地域振興とかという話ではなくて、その前段としてとりあえず足元のホームグラウンドを金をかけずにゴルフ場のように整備しようという話なのです。

私は昔、野球をやっておりましたが、グラウンドが汚いと余りいい野球ができないんです。それと同じようにホームグラウンドにしても、荒れていると住む人の気持ちも後ろ向きになります。気持ちが後ろ向きになれば、ますますやぶの中に入っていきます。要するに悪循環です。ところが、自分の部屋もきれいになれば少しは気持ちもすっきりするわけですので、私は大体自分の部屋は汚いんですけれども、気持ちも前向きになると思います。

そういうことで、とにかくまずはホームグラウンドをきれいにして気持ちを前向きにしよう。話はそれからだということで、集落放牧に取り組んでおります。

うまくしゃべれませんでした。そういうことを私は言いたかったのでございます。ご清聴いただきまして、まことにありがとうございます。(拍手)